

“コロナ禍” “重用”について [意見交換]

第1449回放送用語委員会では、以下の2つの議題について意見交換を行った。

議題1：「コロナ禍・コロナ下」について

議題2：「重用」の読みについて

議題1 「コロナ禍・コロナ下」について (意見交換)

新型コロナウイルスの感染の拡大が続くなか、この1年で急速に広まったことばである「コロナ禍(か)」を取り上げた。本来、「コロナ禍」の「禍」は「わざわい」という意味だが、「コロナ禍の春闘」など、「(わざわい)のもと(元)」「(わざわい)の状況下」という意味にまで広がっているような使い方もされている。「コロナ禍で」「コロナ禍のもと」「コロナ禍の中」など、「コロナ禍」のあとに続く助詞に注目し、「コロナ禍」を放送で使う場合はどのような使い方が望ましいと考えるのか、また、「新型コロナウイルスの感染が拡大している状況下」という意味で使われる「コロナ下」ということばについてはどう考えるのか、放送用語委員から意見を聞いた。

■「コロナ禍」ということばについて

(1) ことばの意味

「コロナ禍」は、新型コロナウイルスの感染拡大が招いた災難や危機的状況を意味すると考えられる。「コロナ禍」の「禍」には、「か」のほか、「わざわい」の読みがある（「わざわい」は常用漢字表に載っていない読み方である）。また、「禍(か)」ということばには「不幸をひきおこす出来事。わざわい。災厄。」（『日本国語大辞典 第2版』）という意味がある。

(2) 「禍」が後ろにつく語

『NHK日本語発音アクセント新辞典』には、以下

の語を掲載している。

奇禍、交通禍、災禍、惨禍、水禍、赤禍、舌禍、戦禍（戦争の被害）、筆禍、葉禍、輪禍

（「戦争による混乱」の場合は「戦禍」）

また、災害や感染症の流行など、悪い出来事の後ろに「禍」をつけて表現されることもある。短くインパクトのある表現として、新聞記事の見出しなどに使われる。

（新聞の用例）

台風禍、津波禍、ノロウイルス禍、ダイオキシン禍、MERS禍、リング禍

（「リング禍」：ボクシングなどの試合で深刻なけがを負うこと）

■「コロナ禍」出現の経緯（新聞・放送）

2020年1月、海外で発行されている日本語新聞や国内の専門紙などで、「ウイルス禍」や「新型肺炎禍」など、「禍」を使った表記が使われ始めた。2月に、スポーツ紙の野球の記事の見出しなどで「コロナ禍」という表記が目立つようになった。3月になり、新型コロナウイルスの社会的な影響がさらに深刻化すると、「コロナ禍」ということばは一気に広がり、新聞社のほか、NHKでも徐々に特集のタイトルなどで「コロナ禍」を使うようになった。また、音声（スタジオの解説や、ニュース原稿の本文）でも「コロナ禍」が使われるようになった。

(1) 日本語新聞の用例

・中国武漢のウイルス禍を伯字紙も大きく伝えていく

（2020年1月24日 ニッケイ新聞（ブラジル））

(2) 専門紙の用例

・新型肺炎禍への不安が再燃するなか、日経平均は一時、……

（2020年1月31日 日本証券新聞）

(3) 一般紙の用例

- ① ついに世界保健機関（WHO）から緊急事態宣言が出た新型コロナウイルス禍である。
(2020年2月1日 毎日新聞)
- ② 新型肺炎禍 自衛の手洗いで痛い目
(2020年2月7日 新潟日報)

(4) スポーツ紙の用例

- ① 新型コロナ禍 朗希に直撃
(2020年2月16日 サンケイスポーツ)
- ② 野球もコロナ禍 OP戦無観客か
(2020年2月26日 デイリースポーツ)
- ③ コロナ禍で出場校揃わない!?
3・19開幕センバツ窮地
(2020年2月29日 サンケイスポーツ)

(5) NHKの原稿（ニュース）の調査

NHKアーカイブスのニュース原稿で「コロナ禍」の出現を調べた。当初はインタビュー内の発言部分として使われるなど用例は限られていたが、経済活動の低下など、感染拡大による社会的影響が長期化するに伴い「コロナ禍」を使用する原稿がだんだん増加していった。2020年11月ごろには、音声も含めて「コロナ禍」が毎日登場するようになった。

NHKアーカイブスの出現（原稿件数）

(2021年2月検索)

2020年3月	1件	2020年8月	28件
4月	3件	9月	63件
5月	2件	10月	90件
6月	23件	11月	130件
7月	12件		

■「コロナ禍」の用例

ここからは、実際に放送で「コロナ禍」がどのように使われているか、後ろに続く助詞などに注目し、NHKの「ニュース原稿」、タイトルなど「放送画面の字幕の表記」、ナレーションや解説の「音声」から用例を見ていく。

(1) 「ニュース原稿」での使用

- ①～が
 - コロナ禍が続く中で新成人を応援しようと、ボランティアを申し出た……
(2020年12月16日)
- ②～は
 - 主席研究員は「コロナ禍は生活者の行動や街の風景を大きく変えた。その中で……」
(2020年11月10日)
- ③～の中で
 - しかしことしはコロナ禍の中での忘年会シーズンになりそうです。
(2020年11月13日)
- ④～のもとで
 - 東京オリンピック・パラリンピックの開会式と閉会式の制作体制について、コロナ禍のもとで迅速に対応していく必要があるとして、……
(2020年12月23日)
- ⑤～において
 - コメントを発表し、「厳しいコロナ禍において国民の皆様には会食や会合を控えていただくようお願いしているにもかかわらず、……」
(2020年12月26日)
- ⑥～で
 - パートやアルバイトで働く女性のうち、コロナ禍でシフトが減った人は4人に1人となっている一方、……
(2020年12月29日)
 - コロナ禍で迎える初めての正月を前に、「新しい生活様式」で……
(2020年12月25日)
 - 文部科学省は、コロナ禍で雇用の維持を図る企業と、企業の人材を教育現場に活用した……
(2020年12月27日)

(2) 「放送画面の字幕の表記」での使用

- ①～で
 - コロナ禍で限界
(2021年1月5日)
- ②～での
 - コロナ禍での予算案 どう評価？
(2020年12月21日)
- ③～の
 - コロナ禍の春闘
新たな働き方・人材育成への対応は
(2021年1月19日)
 - 背景はコロナ禍の金融政策
(2020年12月16日)
- ④～に
 - “コロナ禍に元気を” 駅前チアリーダー
(2020年12月25日)

(3) 「音声」での使用

- ①～の中
• コロナ禍の中、都市部を中心に拡大している食事の配達ビジネスです。
(2020年12月1日)
- ②～のもと
• コロナ禍のもと、例年とは大きく違う年の瀬を迎えています。
(2020年12月29日)
- ③～のもとでは
• コロナ禍のもとでは、財政の再建は簡単ではありません。
(2020年12月21日)
- ④～に
• 続いては、コロナ禍に生きる人々を元気づけようという動きです。
(2020年12月25日)

■ 「コロナ禍」など

一部の新聞社や通信社では、「新型コロナウイルスの感染が拡大する状況下」「新型コロナウイルスの感染が拡大する中」という意味を明確にするため、コロナ禍に「～のもと」という意味の「下(か)」をつけた「コロナ禍」など以下のような表記も一時、散見されたが、普及しなかった。

- 「コロナ禍」：コロナ禍 + 「下(か)」
- 「コロナ禍中」：コロナ禍 + 「中(ちゅう)」
- 「コロナ渦中」：コロナ + 「渦中」

(渦中：「(うずまきの中の意) 事件・もめごとなどで大騒ぎをしているところ」『新明解国語辞典 第8版』)

■ 「コロナ下」

一方、「～のもと」という意味の「下」を「コロナ」のすぐ後ろにつけた、「コロナ下(か)」は、「コロナ禍」ほど数は多くないものの、一部の新聞社や通信社のほか、行政のウェブサイトなどでも継続的に使われている。

- ① コロナ下受験 試金石に
(日本経済新聞 2021年1月17日)
- ② コロナ下のまとめ買いで来店客1人あたりの売上高は6・4%増えたが、……
(朝日新聞 2021年1月21日)
- ③ コロナ下の女性への影響と課題に関する研究会
(内閣府男女共同参画局ウェブサイト)

■ 「コロナ禍」と「コロナ下」の使い分け

NHKでも、「新型コロナウイルスの感染が拡大している状況下」という意味で、「コロナ下」が使われることはある。しかし、多くは「コロナ禍」との使い分けが難しいうえ、発音・アクセントとも「コロナ禍」と同じであるため、音声だけではどちらであるかを判別することができない。このため、NHKでは、より一般的な「コロナ禍」を使って表現するケースが圧倒的に多い。

■ 意見交換を前に論点整理

事務局から、意見交換の論点として、以下の点を挙げた。

- ナレーションなどでは「(新型コロナウイルスの)感染の拡大が続くなか」などと略さずに伝えるのが最も望ましいと考えるが、「コロナ禍」を使って「状況下」という意味も伝えたい場合は、後ろに続く助詞は何が適当だろうか。もしくは、「コロナ禍」ということば自体に、「状況下」という意味も含まれつつあると考えられるのだろうか。
- 「コロナ禍で」の場合、「(コロナ禍が)原因で」という意味で使われている場合と、「(コロナ禍)という状況が起きている場所で」という意味で使われている場合があるが、「で」の使い方としては適当だろうか。
- タイトルなど放送字幕では「コロナ禍の○○」という表記も多い。名詞と名詞をつなぐ「の」にはいろいろな意味があり、どういう意味の「の」なのか悩む場合がある。

■ 意見交換

報告のあと、出席した放送用語委員(外部識者)からは以下のような意見が出た。

視聴者は、コロナに苦しむ「状況下」という意味も含んだ新語として、「コロナ禍」を受け止めているのが現状だろうが、言いかえて略さず伝えるほうがわかりやすい。個人的に感じていることだが、「コロナ禍」の「禍(わざわい)」ということばがとんでもない嫌いだ。コロナというだけで人が苦しんでいるのに、放送を見ている人、新聞を読んでいる人を怖がらせる意図が入っているように思える。現状としては「コロナ禍」を使わざるを得ないことは理解しているが、冷静なこ

とばで言いかえができるところは、言いかえをしたほうがいい。

「コロナ禍」は、これまで聞いたことがないくらいの速度で広まり、一般的になったことばだ。おおとは「コロナ」+「禍」で視覚的に伝えようという書きことばとして広まったことばだったのではないか。

本来は、音声で伝えるには、必ずしも適していないことばという印象もあるが、そんなことを言っている暇もなく、使わざるを得ないことばになっている。「コロナ禍のもとで」とか「コロナ禍において」がよいだろう。また、「コロナ禍で」の「で」にいろんな意味を持たせ、「それで通じるよね」というような使い方はとても多く見られるが、気になるというほどではない。

「コロナ禍」は、コロナによる災害だ。「災害でシフトが減る」という文は、「災害という“原因”でシフトが減る」ということであり、「災害という“状況”でシフトが減る」とは解釈できない。また、「災害で迎える初めての正月」とも絶対に言わない。コロナの「禍」に「で」をつけて状況を表すというのは、少し難しく、「コロナ禍のもとで」「コロナ禍において」という表現を使うのがよいのではないか。

「コロナ下」はあまり使われておらず、自分でも使わないが、「コロナ」という名称だけで、コロナウイルスによる災厄という意味と理解して使うのは、比喩的な使い方としてはありうるので、「コロナ下」と書いて「コロナの感染症の状況で」という意味で使うのは悪くはないのではないか。

新しい言い方は、文法的にどう捉えるか、意味は何か、ということがしばしばあいまいになりがちであるが、新しい言い方が広がっていく初期段階においては、いろいろな言い方が試みられるのが当たり前だ。みんながその言い方を使うようになり文法的にも意味がはっきりしてくると「こう言えばいい」という合意ができてくるものだ。今の段階では「こうすればいい」ときちんと言うのは難しい。「禍」には確かに「状況下」という意味はないが、聞き手側が「コロナ禍は、(コロナの)状況下という意味で使っている」と

誤解せずに理解できるのならば、問題はないだろう。

単語にくっつく「禍」は、[カ]という短い音しか持たない。「ペスト禍」とか「サリドマイド禍」など、主に書き言葉で使われてきたが、一般のなじみがそれほど高いものではなく、「わざわい」とか「災害」を惹起(じゃっき)する力が弱かった。コロナのまん延により、必要とされることばになり、多用されるようになったが、重い意味を持つわりにはインパクトが弱いという面があると感じている。

また、[コロナカ]と耳で聞いたときに、瞬時に「コロナ禍」「コロナ下」のどちらなのか、よほどの文脈の特定がない限りは判断しにくい。「コロナ下」では何か不足感があるが、「コロナ」ということば自体にまがまがしいニュアンスがこびりつき「わざわい」という語感を帯びているので、どちらに捉えても同じような解釈ができてしまう。話すときの原稿としては、「コロナ下」と「コロナ禍」の使い分けはさほど必要がないのかもしれない。

また、論理的には「コロナ禍下」がもっともだが、[カカ]と同音連続で意味がわかりにくくなる。「コロナ禍のもとで」「コロナ禍にあって」「コロナ禍で」「コロナ禍において」といった言いかえを適宜していくのがよいだろう。

「コロナ禍の中で」などのほうが厳密だとは思いますが、早口言葉のよう言いにくく、そこまで普通の人は求めていないのではないか。最初は「コロナ禍」というあくまで「わざわい」という意味だったものが、使っているうちに「その元で」という意味まで拡大してきているのではないか。「コロナ禍で」と「で」を使っておけばあまり違和感がないことが多い。

また、「の」については、「雨のキャンペーン」などという使い方もある。厳密に考えると変な使い方なのかもしれないが、テロップ(放送画面の表示)において、「の」はかなり広い使われ方をするので、「コロナ禍の春闘」「コロナ禍のキャンペーン」についても、それほど違和感のない視聴者が多いのではないだろうか。

また、現場の声として、部内の放送用語委員からは以下のような意見が出た。

新聞各社が「コロナ禍」を使い始めたときは、便利なことばだとは思ったが、耳で聞いてよくわからないということもあり、はじめは、報道の現場ではあまり使わないようにしていた。しかし、事態が長期化し、休校や経済活動の低下など社会的な影響があまりに大きくなったときに、それを指し示す、社会的なことばとして放送に入ってきたのが実態だ。災害とも似ているが、ちょっと違うこのコロナの状況下を示すことばとして、「コロナ禍」がマッチした。「コロナ禍の中で」が日本語的には正しいのかなと思いつつ、「コロナ禍で」でもそれほど違和感がないように思う。

3～4か月ぐらい前までは「コロナ禍」を使うのに抵抗があったが、ここまで「コロナ禍」が市民権を得てしまうと、逆にそのことばを使わないと伝わりにくい面がある。「コロナ下」だと「さいなまれていく状況」が省略されてしまい、私たちが伝えたいことが十分伝えきれない。短い放送時間の中できちんと伝えていこうとすると、便利なことばとして「コロナ禍」を使ってしまうという傾向がある。「コロナ禍」の使い方には日々悩んでいるが、「コロナ禍の春闘」「コロナ禍の経済状況」という使い方には自分としては違和感がある。

普段、メールでやりとりをするときには、「コロナ下」をわりと使う。放送上どうするかということになると悩むが、日常的には、「コロナ禍」と「コロナ下」では耳で聞くと同じなのでなんとなく通じてしまう。

「コロナ禍」と一口に言っても、被害の様相はさまざまだ。あまり便利に使いすぎると、表現は難しいが、被害を軽く言ってしまうことになりかねないかと思う。時には、どういう被害なのか、具体的な場面を想定して言いかえることも必要ではないだろうか。

議題2

「重用」の読みについて（意見交換）

重用[ジューヨー・チョーヨー]の読みについて、新たに世論調査を行い、結果を報告した。調査結果から、読みの優先順位とその説明が適切かどうか意見交換を行った。

以下は決定ではなく、意見交換の議題として出された案である。なお、現在の『NHK日本語発音アクセント新辞典』に記載されている読みの優先順位は、案と同じ1[ジューヨー]、2[チョーヨー]である。

重用：1. [ジューヨー] 2. [チョーヨー]

ただし、歴史上の事柄については、[チョーヨー]と読んだほうがよりふさわしい場合もある。また「重要」との混同を避けるため、コメントでは、「重要な地位に取り立てる」「重く用いる」とするなど、必要に応じて表現を工夫する。

意見交換では、「重用」が、必要に応じて言いかえをするなど、柔軟に対応すべきことばであるという点ではおおむね一致した。一方、「歴史上の事柄については、[チョーヨー]と読んだほうがよりふさわしい場合もある」という表現が適切かどうかについては、今回の調査結果だけではわからないのではないかという指摘も出され、今後も調査を継続することになった。以下、「重用」ということばの特徴について説明する。

■これまでの用語委員会での決定

「重用」[ジューヨー・チョーヨー]の読みをめぐっては、1999年2月に開かれた第1195回放送用語委員会で、それまでの[ジューヨー]の読みに加えて[チョーヨー]の読みも認める以下の決定を行っている。

コメントでは、文脈に応じて分かりやすい表現を工夫するのが望ましい。ただし、引用などで文字どおり読む必要が生じた場合は、以下のとおりとする。

1. ジューヨー 2. チョーヨー

(第1195回放送用語委員会より)

■ 二字漢語 (音読みする語)

〔チョー〕は漢音, 〔ジュー〕は呉音(『漢辞海 第4版』)。〔ジュー〕と〔チョー〕のどちらで読むかを『NHK日本語発音アクセント新辞典』で調べた。

(1) 「重〇」

ジュー: 重圧, 重囲, 重患, 重機, 重刑, 重言, 重厚, 重婚, 重罪, 重刷, 重視, 重々, 重症, 重唱, 重傷, 重心, 重臣, 重水, 重税, 重責, 重奏, 重曹, 重層, 重体, 重大, 重代, 重鎮, 重点, 重電, 重度, 重任, 重罰, 重犯, 重版, 重病, 重文, 重宝 (大切な宝物), 重砲, 重役, 重油, 重要, 重量, 重力

チョー: 重畳 (山岳~), 重宝 (~がる), 重陽

両用: 重複 1チョーフク, 2ジューフク

(2) 「〇重」

ジュー: 加重, 荷重, 過重, 嚴重, 五重, 三重, 自重 (それ自体の重さ), 体重, 鈍重, 二重, 比重

チョー: 貴重, 軽重, し (輻) 重, 自重 (品位を保つて慎む), 慎重, 莊重, 尊重, 珍重, 丁重, 偏重

事務局からは, 以下の2点を説明した。

- 「重〇」では〔ジュー〕と読む場合が多い。
- 物理的な重さと関係が薄い場合に, 〔チョー〕と読む傾向があるのではないかと。

■ 国語辞典での「重用」の読み

『日本大辞典 言泉』(1927年)や『大辞典』(1935年)など, 戦前は, 〔ジューヨー〕の読みのみを載せる辞書が優勢だった。

また, NHKの放送で使う標準的なアクセントを記載した1943年刊行の『日本語アクセント辞典』にも〔ジューヨー〕の読みのみを掲載している。

しかし, 徐々に〔チョーヨー〕も載せる辞書が増え, 『大辞林』は, 初版(1988年)から〔チョーヨー〕を主見出しにとっている。また, 『日本国語大辞典 第2版』は, 「重用」(ちょうよう)の項に江戸時代の以下の用例を載せている。

読本・椿説弓張月(1807-11) 拾遺・四九回
「鶴は逆臣毛国鼎が子なり。もしこれをしも重用(チャウヨウ)して, 按司とせば」

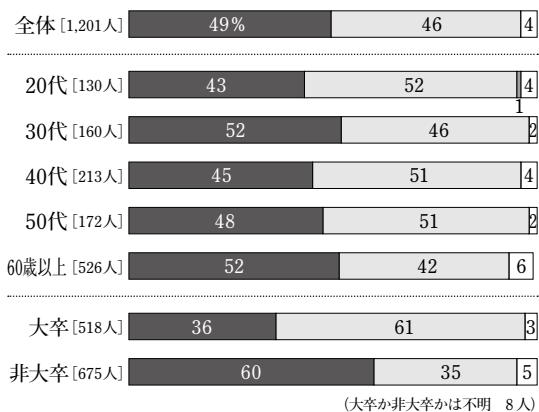
■ 世論調査の結果

世論調査は, 「この会社は若手を重用している」「信長は秀吉を重用した」という2つの文について実施した。

【質問①】: カッコの中の部分について, あなたはどう読みますか?

「この会社は若手を【重用】している」

図1 「この会社は若手を【重用】している」

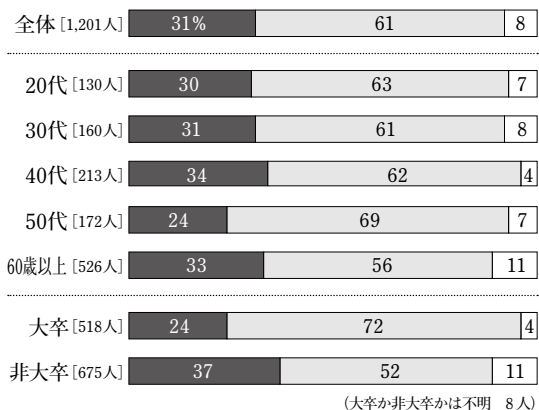


■ [ジューヨー] □ [チョーヨー] ■ その他 □ わからない

【質問②】: カッコの中の部分について, あなたはどう読みますか?

「信長は秀吉を【重用】した」

図2 「信長は秀吉を【重用】した」



■ [ジューヨー] □ [チョーヨー] ■ その他 □ わからない

実施日：2020年11月6～15日／抽出方法：層化副次（三段）無作為抽出法／調査方法：調査員による個別面接聴取法／調査対象：全国の20歳以上の男女4,000人／回収数（率）1,201人（30.0%）

（参考）過去の世論調査

「この会社は若手を重用している」

1. ジューヨー 751人（54%）
2. チョーヨー 574人（41%）

（ことばのゆれ調査（全国）、1,404人、1999年1月）
（塩田雄大（1999）「用語の決定」『放送研究と調査』49-4）

（参考）過去のアンケート調査

「信長は秀吉を重用した」

1. ジューヨー 15人（17%）
2. チョーヨー 69人（80%）

（首都圏在住元NHK番組モニター調査、86人、1991年8月28日～9月10日）
（塩田雄大（1999）「用語の決定」『放送研究と調査』49-4）

「この会社は若手を重用している」の質問文では、「[ジューヨー]と読む」と答えた人が49%で、「[チョーヨー]と読む」と答えた人の46%をわずかながら上回った。過去の調査結果では、[ジューヨー]のほうが比較的多かったが、今回の調査では「[ジューヨー]と[チョーヨー]とでそれほど大きな差は見られなかった。また、年代別では大きな差は出なかったが、学歴で見ると、大卒のグループで、「[チョーヨー]と読む」と答えた人が「[ジューヨー]と読む」と答えた人より多かった（図1）。

また、「信長は秀吉を重用した」の質問文では、「[チョーヨー]と読む」と答えた人が61%で、「[ジューヨー]と読む」と答えた人31%を上回った。「わからない」と答えた人も8%いた。年代別の大きな差はなかったが、学歴で見ると、大卒のグループで「[チョーヨー]と読む」と答えた人の割合が高かった（図2）。

「[チョーヨー]と読む人が大幅に増えているのではないか」という想定で行った今回の世論調査だったが、結果から見るとそこまで増えているとは言えず、今回の結果をもとに、1[ジューヨー]2[チョーヨー]とする読みの優先順位を変更するのは難しいと考えられる。このため、読みの優先順位を維持したまま、新たに「歴史上の事柄については、[チョーヨー]と読んだほうがよりふさわしい場合もある」という、説明を付け加えることが適切かという点を中心に放送用語委員の意見を聞いた。

■意見交換

放送用語委員（外部識者）からは、以下のような意見や指摘があった。

「重」という字は、[チョー]と読まないで恥ずかしいというような感覚が一般にあり、特に歴史と歴史的なことに関わる時に、注意しなくてはならないという感覚が芽生えるのではないだろうか。かつての放送用語委員会（注：第1376回（2013年12月）、『放送研究と調査』64-3）で「捲土重来」を「ケンドジューライ」と読むか「ケンドチョーライ」と読むか、という議論もあったが、四字熟語だと「ケンドチョーライ」にしたいかという感覚につながっているのではないか。

現代では、誰かを重く高い地位に取り立てるという用法で「重用」を使うことが減っているのではないか。頭の中にある語彙は、大きく「理解語彙」と「使用語彙」に分かれる。「理解語彙」は、読んだり聞いたりしたら意味を理解できる語彙であるが、その数には個人差が相当ある。「理解語彙」の中から、実際に使う語である「使用語」が選ばれると考えられるが、現代では、歴史小説や歴史ドラマで「重用」を覚えた人たちが、「理解語」をたまに使用してみるというふうにシフトしているのかもしれない。

「重」を音読みで読もうとすると自然に出てくる音は「ジュー」だということはほぼ言えるだろう。「重用」という語を使わない、理解していない人は、「ジューヨー」という読みに傾くのではないか。また、「重なるという意味では[チョー]と読まないといけない」と思い込んでいる人が一定数いるようだ。「重複は重なるという意味を持っているので[ジューフク]と読むのは間違いで、[チョーフク]と読まないといけない」と言う人もいるが、根拠はあまりない。ただ、そういう意識が、重なるという意味のない「重用」を「ジューヨー」に変える1つの理由になっていそうだ。

「[チョー]と[ジュー]では、[ジュー]のほうが重さを感じさせることばに使われる」という指摘はおもしろい。濁音のほうが音声は低めになるので、「重い」という意識とつながっている人がいるのかもしれない。

調査結果を見ると、引用するときなどには読まないといけないという場合もあるが、積極的に使わないほうが安全なことばだと思った。調査に答えたかなりの人にとって、「重用」は「使用語彙」ではなく、読めと言われたから[ジューヨー]と読んだだけという人もいるのではないかな。

また、「重用」が「理解語彙」にあった場合も、漢字で書いてあったらわかっても、[ジューヨー]と耳で聞いたときに「重く用いる」と本当に理解しているのだろうか。「重用[ジューヨー]している」と言っているのに、「重要視している」と理解していることも結構あるのかもしれない。

私自身は[チョーヨー]を使っているのですが、ゆれているという調査の結果に新しい事実を知った気分になったが、今回調査した2つの質問文の文脈は、意味がずいぶん違う。「会社と若手」の関係と、「信長と秀吉」の関係はだいぶ違う。人間関係の反映などさまざまなこともありうるので、歴史上の事柄だから[チョーヨー]のほうがふさわしいというのは、言いすぎだという気がする。もっと調査をしてみないとわからない。

「歴史上の事柄については、[チョーヨー]と読んだほうがよりふさわしい場合もある」の一文は必要だろうか。頻度は高くないかもしれないが、[チョーヨー]は普通に世の中で使われていることばであり、むしろ、[ジューヨー]のほうが使われている頻度が少ない。

「若者を重用する」というように一般的な場合は[ジューヨー]が適当なのかもしれないが、個人を特別に取り立てる「寵愛(ちょうあい)する」という意味が入るような場合は[チョーヨー]のほうがピンとくる。[チョーヨー]を歴史的なことばとして追いやってしまうのは、ちょっとどうでしょうかという感想だ。

辞書などを見ると、[チョーヨー][ジューヨー]は、どちらの読みも江戸時代くらいからあったのではないだろうか。「大事だ」という意味の「重要」と同音異義語だが、「重要」の後ろに「する」をつけ、「重要する」とは言わないので、混

同されやすいということはないだろう。自分は[チョーヨー]を使い続けてきたが、歴史上の事柄だから[チョーヨー]が使われるかどうかについては、もっと調べたほうがよいだろう。

中島沙織 (なかじま さおり)

第1449回 放送用語委員会(東京・リモート開催)

【開催日】2021年2月5日(金)

【出席者】青木奈緒氏、井上由美子氏、
荻野綱男氏、笹原宏之氏、
野田尚史氏、町田健氏、
大里智之 放送文化研究所長 ほか